

令和5年度第2回青森県立郷土館協議会について（会議概要）

令和5年度第2回青森県立郷土館協議会が開催されましたので、その内容をお知らせします。

1 日 時

令和6年2月14日（水） 13時30分～15時44分

2 場 所

青森県立郷土館 小ホール

3 案 件

- (1) 議長及び副議長の選任
- (2) 令和5年度事業実施状況及び利用状況
- (3) 令和6年度事業実施計画
- (4) 青森県立郷土館の博物館評価
- (5) 県立郷土館長寿命化改修の状況について

4 委員からの主な意見

- あおもり街かど探偵団について、例えば三十三観音の御開帳に合わせて行うとか、歴史探訪としてのツアーなどを組むのも良い。地元の博物館と共同で行うのも良いと思う。学芸員の専門性を活かした内容として欲しい。内容を外に発信して、県外からの観光客に、このツアーを案内すれば、商売にもなるのではないか。
- 青森県内では、希少種や絶滅危惧種の増殖をしているような組織・機関がなく、生息している、生育している場所の消滅や、何らかの原因で絶滅という状況になっている。浅虫水族館には、両生類や陸地の水棲生物であるニホンザリガニなどの増殖をして、生態を観察できる仕組みはあるが、植物や哺乳類の絶滅を回避するための増殖や生育地の保全などは、自然保護課がやっているところもあるが、郷土館にもその役割を担ってほしい。
- 出前授業について、3年生の「古い道具と昔の暮らし」の道具は、学校現場の教員が用意することは難しいので、続けて欲しいと思う。また、教科書が改訂されて、4年生の12月頃の授業だと思うが、各町などの年代ごとの地図を比べて、町の発展を知るという単元がある。そちらも教員が資料を集めるのに苦労するところであり、また、4年生は地元の地域というよりは、県内全域を学ぶ学年になっているので、県立郷土館が持っている資料を活用した授業づくりをしたら、冬の授業として人気が出るのではないかと思う。
- 郷土館のホームページに資料検索と資料の360度ビューがあるのは、博物館では画期的で、いろいろな使い方があると思う。この土器が見たいと思って、見に行く前に360度

で見られるのは、研究する側にとって重要なことだと思う。全国にこの取組を発信していいと思う。休館してる今こそ、ここに力を入れれば、青森県立郷土館ならではの特徴が出るのではないかな。360度ではなくても、4方向から見られるだけでも全然違うと思う。

- 土曜セミナーについて、例えば5回ぐらいのシリーズ物みたいな形で、まとめていくことはできないか。何回か聞いていくと、その分野のそのテーマについて知識が深まっていく、といった見せ方もあるように思う。テーマ自体は魅力的なので、その順番の組み方とかに工夫があると、もっと人を呼びやすくなる。
- 中学校としては、歴史や地理だけではなく、例えば家庭科でこういう昔の道具があります、ということが発信されると、教科の先生方から是非活用したい、という意見も出てくるのではないかなと思う。
- 「使命」について、「支援」という言葉から、「場を提供」という言葉に置き換えられている。「支援」の方がより積極的なイメージがある。支援をしてあげます、郷土の歴史・文化・自然に関しては、こちらが支援してあげる、でいい。支援される方も安心すると思う。
- なぜ郷土館という名称を使っているのか。駅からも遠くなく、地の利もいいところで、海外からの観光客が来ている中で、わかりやすい名称に変えることも検討していいのではないかな。
- 郷土という言葉は、戦前に作られた言葉で、この館を作るときに戦前の匂いがする名前にしたのではないかな。休館をきっかけとして新しい博物館にしてもいいのではないかな。
- 昔の「郷土」のイメージと、今の人たちの「郷土」のイメージは、もしかしたら違うのかもしれないが、博物館という名前がついた方が、全国、海外からくる観光客にはわかりやすいのではないかな。「郷土」を残したいなら、青森県郷土博物館というように変えるのも一つの方法であろう。
- 基本的運営方針については、もっと攻めた表現にしてもいい。コロナやインフルエンザのような状況変化があったときには、文言を足すとか、最初からそれを想定して、状況変化があったら何々をする、ということをつけ加えればいいのではないかな。
- 青森は方言がたくさんある珍しい県だと思うので、方言や地域の郷土料理などを活用しない手はない。
- ICOMの定義のところに「コミュニケーションを図り」と書いてあるが、この改定案を見ると、コミュニケーションを博物館がどうやって取りたいのかということが見えない。

博物館がどのように県民に働きかけ、コミュニケーションを取ろうとするのか、そのコミュニケーション、博物館側の考えというものを、見せていただきたい。誰が誰に対してどういうコミュニケーションを投げかけるのか、そしてその投げかけたことに対してレスポンスがあったときに、どう受け取るのか、ということを明確にすると、博物館の運営方針もそうだが、展示についても、どうしたらもっと理解が進むのか、というようなことに意識が及ぶと思う。もう少し詰めると、より面白い展示、あるいは博物館になっていくのではないか。

- 運営体制のところに、コミュニケーションという言葉があった方が締まると思う。
- 「青森県の中核的博物館」とあるが、「的」を入れることで、中核としての自負が足りない感じになる。青森県の総合博物館はこの郷土館であり、中核であるということを明確にしてほしい。
- 10年先の将来に本県の人口が100万を切り、児童生徒数が4割以上減少する。そういう20年先15年先に郷土館はどうやって運営していくのか。入館者数と収入をどう変えていくのか。ターゲットが見えない。
- 博物館法改正で文化観光など地域の活力の向上、地域活性化ということが出てこない。修学旅行、海外からの観光客がここに来て、青森県をわかってもらい、そのための施設に、中核になるんだ、という姿が見えない。
- 基本的運営方針の改訂案について、「当館の収蔵資料を活用して」は、「当館を訪れた人々が収蔵資料を活用し」とした方がよくないか。
- 情報発信について、SNSでは外国語発信があった方が良いのではないか。津軽弁、南部弁を英語字幕、中国語字幕付きで発信する、といったことも必要。
- 基本的運営方針の改訂案について、「県民の」とあるが、「県民」と書く必要はない。国内はもとより広く海外へ発信するんだ、というぐらいの気概を持ってほしい。
- 大学の学生を見ていると、テキストで理解しようと無理をしている。博物館に来て学ぶということは、物質性とか身体性というところと切り離せないと思う。いかに触れるか、体を動かして理解するというようなことを、この展示の中に取り入れてほしい。
- 郷土館が入口になって、ここから美術館や三内丸山など、いろいろなところに行きたくなるようなものを展示して、興味を持った人が流れていくような、回遊を作ることも重要。ここで完結して、満足するのではなく、青森の文化に触れて、もっと深く知りたい、という回遊を作れる場所にしていただきたい。

- 言語や、障がいのある方などが不便なく利用できる、例えば全盲の方でも音声で聞いたり手で触れたりできるような展示があったり、耳が聞こえない方は目で見て読んで触ってというようなところを意識した建物と展示にしてほしい。
- いろんな美術館、博物館で一番混んでいるのはミュージアムショップなので、小さなスペースでも、ちょっとしたクリアファイルや付箋でもいいので、立ち寄ってみようかと思えるようなものも考えてほしい。
- 学校で利用する際、1時間しか時間がないという場合や、2時間取れる3時間取れる場合など、いろいろなケースがあると思う。そのときに、ざっとみることもできるし、集中して、展示ケースに向かい合ってみることもできる、というようなところの繋ぎが必要。小学校3年生から6年生の子どもたちは、大きなものや迫力のある写真などにまず惹かれて、ここ何だろう、と見た後に、例えば縄文土器で、文様が違うね、などと書いてあって、その後展示ケースをぐっと見るといふ流れになると思う。1時間で見るならここを見てほしい、まずここに注目してほしい、その後に、そこにはこんな面白さがあるよ、というふうに繋ぐような何か仕掛けみたいなものがあれば、大人も子どもも楽しく見られるのではないか。
- 展示案で、ディスカバリーコーナーがあったが、それよりも子どもたちが興味を持ったときに、この文様って何か教えてって言えるように、できれば展示の近くに、それを教えてくれる誰かがいたら、素敵かなと思う。
- 総合博物館には、自然系の、特に植物や生物系を専門とする学芸員がいて然りと思う。
- 県立高校では、今年度から県教委の事業である「あおもり創造学」に、全高校全生徒が取り組んでいる。各校のテーマ設定が全て示され、ホームページにもあるが、それに対して郷土館からもサポートをお願いしたい。
- 小学生に優しい展示、わかりやすい展示、ぱっと見て、素敵だなと思う何かがある博物館というのは、大人も外国の方も素敵な博物館だと思えると思う。
- ミュージアムショップは、子どもでも修学旅行でも、そこでお土産が買えるというのは、一つのステータスだと思う。
- 青森にしか見られないもの、そして八戸に行ったり弘前に行ったりするような、そういう発信する郷土館になってほしい。
- アーキビストという職について、本県ではまだ例がないので、ぜひ、県立郷土館から始めていただきたい。

- DXがもてはやされているが、発信するには若い方たちの感性が大変重要になる。もっと若者や学生の意見を取り入れるのも非常にいいことではないか。
- ミュージアムショップがあつて、県内各地の珍しい郷土料理を集めて試食ができて、買うことができるところが併設したら、魅力的だなというふうに思う。
- 将来的に人口が減っていくと、税金も予算も減っていくので、いくらかでも活動をお金にしていけると、魅力の発信にも繋がっていくと思う。そういったところも膨らませて、楽しい郷土館を作っていただきたい。
- 展示が狭くなるなら狭くなるのやり方がある。ここのところは少し説明が足りないけども、ここ行ったら分かります、という案内があれば、海外の人でもまずはここに来て、というようになる。
- ここ何年間かは休館の状態が続くが、今この時期に館を運営していないことを逆手に取って、それをメリットとして活動したらいいのではないか。10数人のための出前講義などをやるのに、労力をかけるより、今こそデジタルアーカイブやホームページの充実というところに力を特化して、休館中だけどすごいことになっている、そして再開したときに、人が来るような流れを作るべきではないか。
- 地域を変えるのは、経済ではなく文化でしかあり得ない。町おこしがうまくいってるところや楽しいことが起きてるところは、大概文化に圧倒的にお金をかけ、そこに仕掛けをしている。今の青森県において、ここにお金をかけなくて、どこにかけるのか。人的配置も、予算ももっと、今こそかけていただければと思う。それで限界があるのだったら、例えばファンディングやいろいろな手段がある。デジタルアーカイブをどんどんやる中で、こんな博物館を作りたいということを言ったら、意外とお金を出してくれる人たちは、たくさんいるのではないか。